

大学生の学校適応に影響する要因の検討

— 大学不適応, 大学満足, 就学意欲に着目して —

中村 真*・松田 英子**

要 約

大学生の中途退学率が増加する背景には、心理的要因としての大学生の適応力の低下があると考え、首都圏の4年制大学の学生を対象に質問紙調査を実施して、大学不適応、大学満足、就学意欲に影響する要因を検討した。その結果、「入学目的の明確さ」および「友人関係の良好さ」は、大学不適応、大学満足、就学意欲のいずれに対しても影響する要因であることが示された。また、大学不適応に直接影響する要因は「授業理解の困難さ」「入学目的の明確さ」であったが、「友人関係」は「大学への帰属意識（大学への愛着）」を媒介して大学不適応に影響しており、間接的な影響をもつことが示唆された。さらに、大学満足に対して直接的に影響する要因は「友人関係」「入学目的の明確さ」「教員への好感」であったが、「施設設備の充実」は「大学への愛着」を媒介して大学満足に影響しており、間接的な影響をもつことが示された。

これらの結果をふまえて、大学生の大学不適応を予防するための方策について考察を行い、今後の研究の課題を述べた。

キーワード：大学生, 大学不適応, 大学満足, 就学意欲, 大学への帰属意識

問題・目的

大学全入時代の到来とともに、我が国における大学生の中途退学率は増加傾向にある。その背景には、近年の経済情勢の悪化とともに、心理的要因としての大学生の適応力の低下があると考えられる。松井・中村・田中（2010）は大学生を対象とする調査結果に基づいて、大学不適応に影響する要因が、友人関係の希薄さ、授業理解の困難さ、入学目的の曖昧さであることを指摘している。一方で、高木（2006）は、大学、アルバイト先、部活動といった組織への帰属意識が大学生の充実感に影響することを明らかにしている。これは、帰属意識が大学不適応に対しても何らかの影響力を

持つ可能性を示唆する。

本研究は、これらの知見を踏まえて、大学生の大学不適応に影響する要因をさらに詳しく検討するとともに、大学不適応に影響する要因が大学への帰属意識を媒介して、大学生生活の満足度を低め、大学不適応傾向を高めているのではないかと考え、これを多重回帰モデルにより探索的に検討する。また、大学不適応、大学満足度に併せて、大学生の就学意欲に影響する要因を明らかにすることによって、大学生の学校適応を高めるための方策を導くうえで有用な基礎的資料の提供を試みる。

方 法

調査協力者

首都圏の4年制大学の学生574名（男性248名、女性326名、平均年齢19.00歳、SD1.10）を対象に2012年6月に質問紙調査を実施した。

2012年11月30日受付

* 江戸川大学 人間心理学科准教授 社会心理学

** 江戸川大学 人間心理学科教授 臨床心理学

調査対象者の性別と学年の内訳は、表1に示した通りである。

表1 調査対象者の内訳

	1年	2年	3年	4年	計
男	124	77	32	15	248
女	204	65	40	17	326
計	328	142	72	32	574

調査内容

調査は、①大学生活のさまざまな側面に関する意識、②大学への帰属意識、③大学生活の満足感・不適応に関する質問、およびフェース・シートで構成された。具体的な内容は次の通りであった。

①は、松井・中村・田中(2010)に新たな項目を加えて構成したものであり、大学生活における友人関係（「大学に仲の良い友人がいる」など）、授業理解の困難さ（「大学の勉強についていけない感じだ」など）、入学目的の明確さ（「はっきりとした目的があって大学に入学した」など）、教員への好感（「大学に信頼のできる先生がいる」など）、大学の施設・設備（「大学の購買環境（コンビニ、生協など）は充実していると思う」など）について尋ねる50項目（6件法）であった。

②は、高木(2003)の「組織コミットメント尺度」、越(2007)の「所属集団に基づくアイデンティティの測定尺度」、本多・井上(2005)の「学級集団帰属意識尺度」、野寺・中村(2011)の「向大学態度尺度」を参考にして、これらの一部を引用（または大学への帰属意識を測定するのに相応しい表現に改変）し、新たな項目を加えて構成したものであり、「私は〇〇大学に愛着がある」など25項目（6件法）から成る。

③は、松井・中村・田中(2010)を参考に新たな項目を加えて構成されたものである。大学不適応（「大学をやめようかと思ったことがある」など）、大学満足度（「この大学に入って正解だったと思う」など）、就学意欲（「大学で学ぶことによって、自分の学力をさらに向上させたい」など）への回答を求める14項目（6件法）であった。

上述の通り、①②③は、いずれも6件法で測定したが、結果の集計・分析にあたっては、「まったくあてはまらない」を1点、「あてはまらない」を2点、「あまりあてはまらない」を3点、「ややあてはまる」を4点、「あてはまる」を5点、「よくあてはまる」を6点と、得点化した。

手続き

調査に先立ち、回答は強制ではなく、評価を伴わず、個人情報の開示されないことを説明し同意を得たうえで、講義時間中に集合調査を実施した。

結果

1. 大学満足、大学不適応、就学意欲の尺度構成

まず、大学満足、不適応感、就学意欲に関する14項目を用いて因子分析（重み付けのない最小2乗法、プロマックス回転）を行った。固有値の推移、因子の解釈の容易さを確認しながら因子数を変えて結果を比較検討し、最終的に3因子を抽出するのが適当と判断した。結果を表2に示す。因子負荷量が、.400以上である項目群によって因子が構成されているとみなして各因子の解釈を行った。第1因子は、「この大学に入って正解だったと思う」「大学生活に満足している」など5項目が高い因子負荷量を示しており、「大学満足」の因子とした。

第2因子は、「大学で学ぶことによって、自分の学力をさらに向上させたい」「大学でさまざまなことを学んで知識や教養を増やしたい」など4項目の負荷量が高くなっているため、「就学意欲」の因子とした。

第3因子は、「授業がある日なのに大学を休みたくなることがある」「大学をやめようかと思ったことがある」など5項目が高く負荷しているため、「大学不適応」の因子とした。

なお、尺度の信頼性係数（ α 係数）は、「大学満足」が.82と高い値を示した。また、「就学意欲」は.78、「大学不適応」は.71でありやや低い値ではあるが、項目数の少なさを考慮すれば、十分な内的一貫性を有しているといえよう。したがっ

表2 大学生生活の満足感、不適応感に関する因子分析結果

項 目	因子1 大学満足	因子2 就学意欲	因子3 大学不適応
この大学に入って正解だったと思う	.912	-.029	.209
大学生生活に満足している	.787	-.021	-.026
大学の勉強に満足している	.535	.164	.041
大学にくるのが楽しい	.533	.121	-.227
この学科に入って正解だったと思う	.520	.217	.066
大学で学ぶことによって、自分の学力をさらに向上させたい	-.061	.809	-.059
大学でさまざまなことを学んで知識や教養を増やしたい	.110	.692	-.028
大学で一生懸命学ぶことは、将来の仕事や人生に必ずプラスになると思う	.145	.612	.084
勉強していろいろなことを学ぶのは楽しい	.021	.539	-.118
授業がある日なのに大学を休みたくなることがある	.212	-.162	.636
まだ授業があるのに、意欲がわかなくて大学から早めに帰宅したいと思うことがある	.039	-.096	.602
大学生生活が辛い（つらい）と感じることがある	-.302	.229	.600
大学を卒業できないかもしれないと思ったことがある	.102	-.031	.532
大学をやめようかと思ったことがある	-.347	.087	.401
α 係数	.82	.78	.71
因子寄与	4.82	1.71	1.53
因子間相関	因子1	.425	-.506
	因子2		-.327

重み付けのない最小2乗法、プロマックス回転

て、以降の分析では、因子ごとに合成得点（1項目あたりの平均点）を算出して用いた。

2. 大学への帰属意識の尺度構成

次に、大学への帰属意識に関する25項目を用いて因子分析（重み付けのない最小2乗法、プロマックス回転）を行った。2つの因子に対して負荷量が高い1項目を除いたうえで、固有値の推移、因子の解釈の容易さを確認しながら因子数を変えて結果を比較検討し、最終的に4因子を抽出した（表3）。各因子は、因子負荷量が.400以上の項目群によって構成されているとみなして解釈を行った。第1因子は、「〇〇大学を気に入っている」「私は、〇〇大学に愛着がある」など8項目が高い因子負荷量を示しており、「愛着」の因子とした。

第2因子は、「私はいつも〇〇大学の学生であることを意識している」など7項目の負荷量が高くなっており、「内在化」の因子とした。

第3因子は、「〇〇大学は、世間一般の評価が高いほうだと思う」など5項目が高く負荷しているので、「ブランド」の因子とした。

第4因子は、「もしも、〇〇大学をやめたら、家族や親せきにあわせる顔がない」など4項目の負荷量が高いので、「規範・世間体」の因子とした。

尺度の信頼性係数（α係数）は、.70～.92と概ね高い値を示しており、それぞれに内的一貫性があると考え、以降の分析では因子ごとに合成得点（1項目あたりの平均点）を算出して用いた。なお、因子負荷量が負の項目は、逆転項目として得点の変換処理を行った。

表3 大学への帰属意識に関する因子分析結果

項 目	因子1 愛 着	因子2 内 在 化	因子3 ブランド	因子4 規範・世間体
〇〇大学を気に入っている	.891	-.114	.078	.066
自分にとって、〇〇大学は居心地がよくて、落ち着くことができる	.890	-.013	-.068	.023
〇〇大学は、自分にとって大切な居場所である	.797	.045	.008	.048
〇〇大学が好きである	.782	.094	.045	.005
私は〇〇大学の雰囲気になじめていない	-.695	.217	-.056	.093
私は、〇〇大学に愛着がある	.680	.234	.037	-.044
私は〇〇大学に受け入れられていると思う	.487	.092	.059	.016
〇〇大学の学生であることを誇りに思う	.461	.114	.364	-.005
〇〇大学の悪口を聞くと、心中穏やかではいられない	-.059	.774	.018	-.015
私はいつも〇〇大学の学生であることを意識している	.113	.755	-.181	-.032
私は〇〇大学の学生の一人であることを実感している	.261	.704	-.213	-.081
〇〇大学の良くない評判を聞くと、嫌な気持ちになる	.006	.664	.074	-.003
私にとって、〇〇大学の学生であることは重要なことだ	.164	.575	.150	-.044
〇〇大学の学生であることは、私の行動や考え方に強く影響している	-.160	.494	.181	.108
〇〇大学の学生であることは、他人の目に映る私のイメージを決定する重要な部分である	-.380	.470	.022	.192
〇〇大学は就職に有利だと思う	.119	-.209	.797	.007
〇〇大学の学生であることが、周囲の私への評価を高めてくれる	-.056	.101	.794	.029
〇〇大学は、世間一般の評価が高いほうだと思う	.094	-.110	.766	-.040
〇〇大学にとって重要なことは、私にとっても重要である	.033	.233	.539	.006
〇〇大学の存在が私を支えてくれる	.108	.230	.528	-.023
もしも、〇〇大学をやめたら、家族や親せきに合わせる顔がない	.091	-.053	-.061	.879
もしも、今、〇〇大学をやめたら、私は罪悪感を感じるだろう	.206	.017	-.098	.739
もしも、〇〇大学をやめたら、世間体が悪いと思う	-.127	.121	.189	.466
私が〇〇大学に在籍しているのは、やめると失うものが大きいからである	-.190	-.039	.032	.416
α 係数	.92	.82	.87	.70
因子寄与	9.49	2.41	1.68	1.37
因子間相関	因子1	.598	.630	.143
	因子2		.654	.293
	因子3			.193

重み付けのない最小2乗法、プロマックス回転 ※項目の「〇〇大学」は、回答者が所属する大学を指す。

3. 大学生生活の意識に関する尺度構成

大学生生活の意識に関する50項目を用いて因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。2つの因子に対して同時に負荷量が高い項目および、

いずれの因子に対しても負荷量が極端に低い項目を除きつつ、固有値の推移、因子の解釈の容易さを確認しながら因子数を変えて結果を比較検討し、最終的に5因子（28項目）を抽出した。結果を表4に示す。

表4 大学生生活の意識に関する因子分析結果

項目	因子1 友人関係	因子2 教員への好感	因子3 施設設備充実	因子4 授業の難しさ	因子5 入学目的
大学に仲のよい友人がいる	.894	-.076	-.001	.019	.078
大学にお互いに頼りあえる友人がいる	.880	.019	.026	-.055	.004
大学にいろいろと相談ののってくれる友人がいる	.850	-.001	-.037	.002	-.016
大学に自分に気をかけてくれる友人がいる	.838	.052	.027	-.022	-.027
大学で友人と過ごすことが楽しい	.824	-.112	.006	.042	.090
大学での友人関係に満足している	.726	.042	-.071	.028	.126
大学に勉強を教え合う友人がいる	.713	.106	.015	-.045	-.166
大学で友人と過ごすことがわずらわしい	-.694	.077	.050	.023	-.092
大学に勉強を教えてくれる友人がいる	.633	.185	.065	.071	-.211
大学にいろいろと相談ののってくれる先生がいる	.000	.909	-.068	-.022	-.002
大学に信頼のできる先生がいる	-.023	.869	.042	-.025	.060
大学に自分のことを気にかけてくれる先生がいる	.006	.847	-.059	.035	-.027
大学に親しみやすい先生がいる	.017	.757	.023	-.050	.038
大学に好感のもてる先生がいる	.094	.469	.150	-.068	.003
大学の購買環境（コンビニ、生協など）は充実していると思う	-.014	-.181	.753	-.024	-.022
大学の受講環境（教室のスクリーン、スライド、DVD機器などのAV設備）は充実していると思う	.014	.048	.726	-.020	-.001
大学の進路支援体制（キャリア関連の授業やガイダンス・就職セミナーなど）は充実していると思う	-.015	.175	.663	.020	.022
大学の授業カリキュラムは充実していると思う	-.038	.170	.662	.096	.076
大学の学生食堂は充実していると思う	.073	-.347	.638	-.126	.000
大学の図書館は、蔵書・設備ともに充実していると思う	-.030	.012	.628	.039	-.058
大学のインターネット利用環境は整っていると思う	-.027	.205	.472	.023	.011
大学の勉強についていけない感じだ	.018	-.036	-.074	.818	-.057
授業の内容が難しいと思う	.037	.063	-.014	.804	-.006
大学の授業のレベルは高すぎると思う	-.083	.024	.079	.707	.075
大学での勉強方法（勉強のやり方）がわからない	.031	-.252	.038	.512	.011
はっきりとした目的があって大学に入学した	-.006	.064	.012	.025	.781
なんとなく大学に入学した	-.007	-.019	.054	.172	-.763
将来の就職（または進学）のことを考えて、現在の大学・学科に入学した	.071	-.018	.049	.200	.581
α係数	.94	.89	.83	.79	.76
因子寄与	7.71	3.16	3.05	2.47	1.81
因子間相関 因子1		.337	.336	-.078	.211
因子2			.222	-.037	.200
因子3				.057	.291
因子4					-.048

最尤法, プロマックス回転

各因子は、因子負荷量が.400以上の項目群によって構成されているとみなして解釈を行った。

第1因子は、「大学で友人と過ごすことが楽しい」など9項目が高い因子負荷量を示しており、「友人関係」の因子とした。

第2因子は、「大学に信頼できる先生がいる」など5項目の負荷量が高くなっており、「教員への好感」の因子とした。

第3因子は、「大学の受講環境（教室のスクリーン、スライド、DVD機器などのAV設備）は充実していると思う」など7項目が高く負荷しているので、「施設設備の充実」因子とした。

第4因子は、「大学の勉強についていけない感じだ」など4項目の負荷量が高いため、「授業理解の困難さ」因子とした。

第5因子は、「はっきりとした目的があって大学に入学した」など3項目の負荷量が高いため、「入学目的」の因子とした。

尺度の信頼性係数は、.76～.94と概ね高い値を示しており、それぞれに内的一貫性があると考え、以降の分析では因子ごとに合成得点（1項目あたりの平均点）を算出して用いた。なお、因子負荷量が負の項目は、逆転項目として得点の変換処理を行った。

4. 各変数の基本統計および変数間の相関関係

先述の因子分析および信頼性分析をふまえて得点化した各変数の基本統計を表5に示す。また、表6は大学満足、就学意欲、大学不適応と大学への帰属意識（4因子）および大学生活に関する意識（5因子）との相関関係を示したものである。これを見ると、大学満足と有意な正の相関関係にあるのは、「規範・世間体」を除く大学への帰属意識に関する3つの因子および大学生活における「授業理解の困難さ」を除く4つの因子であった。「授業理解の困難さ」とのあいだには有意な負の相関がみられた。

また、就学意欲は大学への帰属意識（4因子すべて）および大学生活に関する意識（5因子すべて）とのあいだに有意な相関関係があった（「授業理解の困難さ」とのあいだが負の相関関係である以外は、すべて正の相関関係）。

さらに、大学不適応は「規範・世間体」を除く大学への帰属意識に関する3つの因子および大学生活における「授業理解の困難さ」を除く4つの因子とのあいだに有意な負の相関がみられた。「授業理解の困難さ」とのあいだには有意な正の相関がみられた。

全体として、大学への帰属意識における「愛着」

表5 各変数の基本統計

大学生生活の側面	因子	平均	標準偏差
大学満足 不適応	大学満足	4.13	.91
	就学意欲	4.68	.76
	大学不適応	3.41	1.01
大学への 帰属意識	愛着	3.64	.94
	内在化	3.31	.87
	ブランド 規範・世間体	2.90	.90
大学生活に 関する意識	友人関係	4.30	1.03
	教員への好感	3.23	1.13
	施設・設備の充実	4.28	.83
	授業理解の困難さ	3.21	.90
	入学目的	3.52	1.23

表6 大学満足、就学意欲、大学不適応と各変数との相関

		大学満足	就学意欲	大学不適応
大学への 帰属意識	愛着	.732***	.354***	-.425***
	内在化	.332***	.313***	-.208***
	ブランド	.432***	.231***	-.251***
	規範・世間体	.068	.123**	.023
大学生活に 関する意識	友人関係	.569***	.314***	-.308***
	教員への好感	.385***	.341***	-.168***
	施設・設備の充実	.427***	.344***	-.239***
	授業理解の困難さ	-.084*	-.174***	.423***
	入学目的	.441***	.353**	-.285**

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

および大学生活における「友人関係」と「入学目的」は、大学満足、就学意欲、大学不適応のいずれとのあいだにも比較的高い相関関係を示した。

5. 大学への帰属意識が大学不適応、大学満足、就学意欲に及ぼす影響

大学への帰属意識が大学不適応に与える影響を検討するために、帰属意識に関する4つの因子を説明変数とし、大学不適応を従属変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った。ステップワイズ法による分析を行う理由は、大学への帰属意識に関する4つの因子の中で大学不適応に最も強く影響する要因を探るためである。

その結果、モデル1では独立変数として愛着因子のみが選択されており、モデル2では愛着因子と規範・世間体の因子が選択された。愛着から大学不適応への標準偏回帰係数（モデル1は-.423、モデル2は-.435）は、いずれも0.1%水準で有意であったが、モデル2の規範・世間体因子から大学不適応への標準偏回帰係数は5%水準で有意であるとはいえ、.084と低い値にとどまった（表7、表8）。これは、1つの変数を使用するのであれば、愛着因子が最も有効な独立変数であることを意味する。また、大学満足および就学意欲を従属変数とする同様の重回帰分析を行ったところ、いずれもモデル1において愛着因子のみが選択されるという同じ結果となった。したがって、本研究では、大学不適応、大学満足、就学意欲に影響

する大学への帰属意識として「大学への愛着」に着目し、以降の分析ではこれを用いることにした。

6. 大学生活に関する意識および大学への愛着が大学不適応に及ぼす影響

大学生活に関する意識および大学への愛着が大学不適応に与える影響を検討するために、友人関係、授業理解の困難さ、入学目的、教員への好感、施設設備の充実、大学への愛着を説明変数、大学不適応を従属変数とする変数減少法による重回帰分析を行った。

表9は最終的に得られたモデルである。その結果、授業理解の困難さ、愛着、入学目的から大学不適応への標準偏回帰係数は0.1%水準で有意であったが、友人関係は10%有意傾向であった。これは、授業理解が困難であるほど、また、大学への愛着が乏しくて入学目的が曖昧であるほど、大学不適応傾向が高いことを意味する。一方、友人関係は大学不適応に対して直接的にはそれほど大きな影響を及ぼさないことが示された。

次に、大学不適応に影響する各要因が大学への愛着（帰属意識）に影響し、愛着が大学不適応に影響するという一連の因果関係を検討するために探索的にパス解析を行った。図1に最終的なモデルを示す。適合度指標は図1に示した通りであり、概ね、データに適合した結果が得られたと言える。これを見ると、大学不適応に直接的かつ最も強く影響するのは授業理解の困難さである。また、大

表7 「大学不適応」の重回帰分析
(ステップワイズ法によるモデル1)

(説明変数) 大学への帰属意識	大学不適応
愛着	-.423***
<i>N</i>	538
<i>F</i>	118.05***
<i>R</i> ²	.18

数値は、標準偏回帰係数 *** *p* < .001

表8 「大学不適応」の重回帰分析
(ステップワイズ法によるモデル2)

(説明変数) 大学への帰属意識	大学不適応
愛着	-.435***
規範・世間体	.084*
<i>N</i>	538
<i>F</i>	61.70***
<i>R</i> ²	.19

数値は、標準偏回帰係数 * *p* < .05, *** *p* < .001

表9 「大学不適応」の重回帰分析
(変数減少法により最終的に得られたモデル)

	大学不適応
愛着	-.303***
友人関係	-.077 ⁺
授業理解の困難さ	.402***
入学目的	-.156***
<i>N</i>	538
<i>F</i>	78.98***
<i>R</i> ²	.37

数値は、標準偏回帰係数 ⁺ *p* < .10, *** *p* < .001

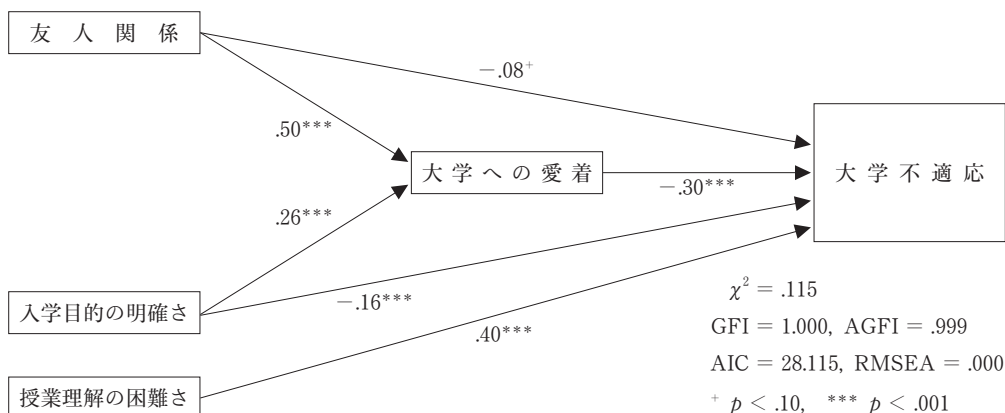


図1 大学不適応に影響する要因間のパス（数値は標準化係数を示す）

学への愛着および入学目的の明確さは、大学不適応に対して負の影響を与えることがうかがえる。一方、友人関係の良好さは、大学不適応に対して直接的には強い影響を及ぼさないが、大学への愛着を媒介して間接的に大学不適応の低さに影響する傾向が認められた（図1）。

7. 大学生生活に関する意識および大学への愛着が大学満足に及ぼす影響

大学生生活に関する意識および大学への愛着が大学満足に与える影響を検討するために、友人関係、授業理解の困難さ、入学目的、教員への好感、施設設備の充実、大学への愛着を説明変数、大学満足を従属変数とする変数減少法による重回帰分析

表10 「大学満足」の重回帰分析
 （変数減少法により最終的に得られたモデル）

	大学満足
愛着	.472***
友人関係	.229***
教員への好感	.097**
施設・設備の充実	.053 ⁺
入学目的	.199***
<i>N</i>	538
<i>F</i>	180.57***
<i>R</i> ²	.63

数値は、標準偏回帰係数 ⁺ $p < .10$,
 ** $p < .01$, *** $p < .001$

を行った。

表10は最終的に得られたモデルである。その結果、愛着、友人関係、入学目的から大学満足への標準偏回帰係数は0.1%水準で有意、教員への好感は1%水準で有意であったが、施設設備の充実は10%有意傾向であった。これは、大学に愛着があり、友人関係が良好で、入学目的が明確であり、教員に対して好感を持っているほど、大学満足が高いことを意味する。一方、大学の施設設備が充実しているという認識は、大学満足に対して直接的にはそれほど大きな影響を及ぼさないことが示された。

次に、大学満足に影響する各要因が大学への愛着（帰属意識）に影響し、愛着が大学満足に影響するという一連の因果関係を検討するために探索的にパス解析を行った。図2に最終的なモデルを示す。適合度指標は図2に示した通りであり、概ね、データに適合した結果が得られたと言える。これを見ると、大学満足に直接的かつ最も強く影響するのは大学への愛着である。また、友人関係、入学目的の明確さ、教員への好感も、大学満足に対して正の影響を与えることがうかがえる。一方、施設設備の充実は、大学への愛着を媒介して間接的に大学満足に影響する傾向が認められた（図2）。

8. 大学生生活に関する意識および大学への愛着が就学意欲に及ぼす影響

大学生生活に関する意識および大学への愛着が就

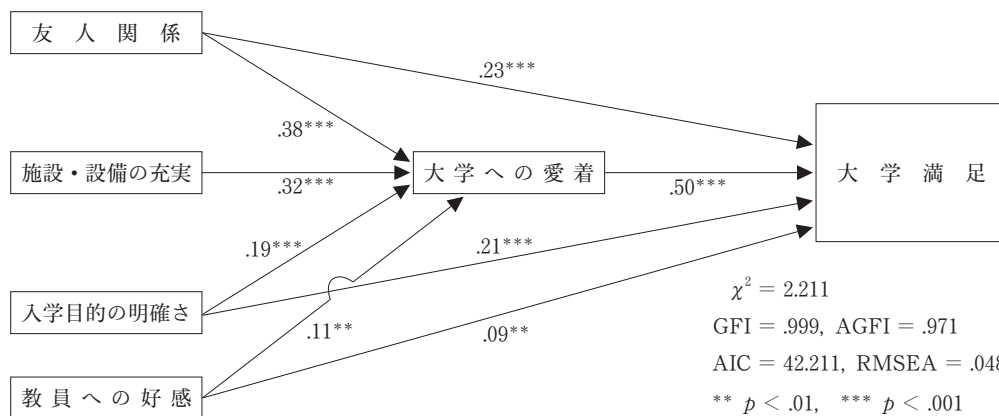


図2 大学満足に影響する要因間のパス (数値は標準化係数を示す)

学意欲に与える影響を検討するために、友人関係、授業理解の困難さ、入学目的、教員への好感、施設設備の充実、大学への愛着を説明変数、就学意欲を従属変数とする変数減少法による重回帰分析を行った。

表11は最終的に得られたモデルである。その結果、施設設備の充実、入学目的、教員への好感、授業理解の困難さから就学意欲への標準偏回帰係数は0.1%水準で有意、友人関係は1%水準で有意であった。一方、愛着は有効な変数ではみなされなかった。これは、大学の施設設備を充実していると認識し、入学目的が明確であり、教員に対して好感を持ち、授業理解度が高く、友人関係が良好であるほど、就学意欲が高いことを意味する。

表11 「就学意欲」の重回帰分析
 (変数減少法により最終的に得られたモデル)

	就学意欲
授業理解の困難さ	-.133***
友人関係	.138**
教員への好感	.203***
施設・設備の充実	.223***
入学目的	.219***
<i>N</i>	538
<i>F</i>	44.90***
<i>R</i> ²	.30

数値は、標準偏回帰係数 ** $p < .01$, *** $p < .001$

なお、上述した通り、愛着は有効な変数ではなかったため、ここでは就学意欲に対する愛着（帰属意識）の媒介効果を検討するための分析を行わなかった。

考 察

1. 大学不適応、大学満足、就学意欲に直接的に影響する要因

大学不適応に直接的に影響する要因は、授業理解の困難さ、大学への愛着、入学目的であり、大学満足に直接的に影響する要因は、大学への愛着、友人関係、入学目的、教員への好感であった。また、就学意欲に直接的に影響する要因は、施設設備の充実、入学目的、教員への好感、授業理解の困難さ、友人関係であった。

すなわち、授業理解が困難であるほど、また、大学への愛着が乏しくて入学目的が曖昧であるほど大学不適応傾向が高く、大学に愛着があり、友人関係が良好で、入学目的が明確であり、教員に対して好感を持っているほど大学満足度が高いことを示している。また、大学の施設設備を充実していると認識し、入学目的が明確であり、教員に対して好感を持ち、授業理解度が高く、友人関係が良好であるほど、就学意欲が高いことを意味する。

このように、入学目的は、大学不適応、大学満足、就学意欲のいずれに対しても直接的な影響力があり、友人関係は大学満足および就学意欲に対

して、そして、授業理解の困難さは大学不適応、就学意欲に直接影響する要因であることが示された。松井・中村・田中（2010）および中村・松井・田中（2011）の結果と同様に、これら3要因は大学生の学校適応を検討するうえで欠かすことのできない要素であることが追認された。加えて、教員への好感、施設設備の充実も学校適応に影響する要因であることが示された。また、後に述べる大学不適応および大学満足に対する間接効果における媒介要因としての機能も併せて考えると、大学への愛着は、大学生の学校適応に多大な影響を及ぼす要素である可能性が示唆されたと言える。

2. 大学への愛着（帰属意識）を媒介して大学不適応、大学満足に間接的に影響する要因

本研究において探索的に検討したパス解析の結果（図1、図2）は、友人関係が大学への愛着（帰属意識）を媒介して大学不適応に影響すること、および、施設設備の充実という認識が大学への愛着を媒介して大学満足に影響することを示した。

これは大学への愛着が、大学生の学校適応において対人的側面および環境的側面の両面にわたって大変重要な働きを有する可能性を示唆するものである。したがって、大学への帰属意識は、大学不適応や大学満足を検討するうえで欠くことのできない要素であり、その影響のあり方を継続してさらに詳しく検討する必要があると言える。

3. 大学生の学校適応を促すために

本研究で得られた結果をふまえて、大学不適応を抑制し、大学への満足感を高め学校適応を促進するための方策を挙げるとすれば、第一に、授業理解を促すような学生への働きかけが重要であると言える。第二に、友人関係を築きにくい学生に対して的確な環境支援を行う必要がある。第三に、入学目的の明確化をはかるために高等学校に対する広報活動および入試方法に一層の創意工夫が求められる。第四に、学生の視点で大学の施設設備の充実化を進める点も重要である。第五に、教員が学生にとって好感の持てる存在であることは不可欠であり、教員の側にも学生の信頼を得るべく

教育研究両面において努力精進することが求められていると言えよう。これらの取り組みが、学生の大学に対する帰属意識を高めると同時に、大学適応に肯定的な影響を及ぼすものとする。

4. 今後の課題

今後の研究課題としては、本研究で得られた知見の一般化可能性を探ることが挙げられる。そのためには、調査対象者数などの制約で今回行わなかった学年別および性差の検討を行うことが必要である。また、大学生活の重要な側面の一つであるサークルおよび部活動が大学生の学校適応にどのような影響を及ぼしているのかに関する検討も行わなくてはならない。さらに、大学不適応ならびに大学満足に直接間接に影響することが示唆された大学への愛着以外の帰属意識についても検討を重ねる必要があるだろう。そして、大学生の学校適応に強く影響する友人関係についても、どのような友人関係を構築することが望ましいのかという観点から、友人関係の質や量をふまえた分析を行う必要があると考える。

参考文献

- 本多公子・井上祥治 2005 高等学校における学級集団帰属意識尺度作成の試み 岡山大学教育実践総合センター紀要 第5巻 109-117.
- 越 良子 2007 中学生の所属集団に基づくアイデンティティに及ぼす集団内評価の影響 上越教育大学研究紀要 第26巻 357-365.
- 松井 洋・中村 真・田中 裕 2010 大学生の大学適応に関する研究 川村学園女子大学研究紀要 第21巻第1号 121-133.
- 中村 真・松井 洋・田中 裕 2011 大学生の大学適応に関する研究Ⅱ — 入学目的、授業理解、友人関係のみを対象者のタイプと大学不適応との関連 — 川村学園女子大学研究紀要 第22巻第1号 85-94.
- 野寺 綾・中村信次 2011 向大学態度尺度開発の試み 日本福祉大学子ども発達学論集 第3号 71-80.
- 高木浩人 2003 多次元概念としての組織コミットメント — 先行要因、結果の検討 — 社会心理学研究 第18巻第3号 156-171.
- 高木浩人 2006 大学生の組織帰属意識と充実感の関係 愛知学院大学心身科学部紀要第2号増刊号 61-67.